研究会報告

『東アジアの租界とメディア空間』研究会

東アジアの租界とメディア空間

日時：2013 年 1 月 11 日、5 月 24 日、7 月 25 日
場所：神奈川大学横浜キャンパス　21 号館 4 階 405 会議室

大里　浩秋（非文字資料研究センター　研究員）
孫　安石（非文字資料研究センター　研究員）

租界とメディア班が開いた研究会についての報告をしばらく怠っていたので、スペースをもらってここに 3 回分をまとめて行いたい。

1　2012 年度最後の研究会を、2013 年 1 月 11 日（金）に開き、孫安石氏と菊池敏夫氏に報告していただいた。

○　孫報告「上海の越界築路問題についてのメモ」は、戦前の日本の租界研究における代表作と目される植田捷雄『支那に於ける租界の研究』をもとに租界の設定とその地域的拡張の経過を押さえた上で、租界工部局と中国側との交渉で「租界内全住民の健康、娯楽及び運動の為め公用に供」する（1866 年の「土地章程」）として設けた「越界築路」がたどったその後の経緯を、1932 年のフィーダム報告や日本の陸軍省の資料「滬西越界路警察権に関する暫定取極の件」（昭和 15 年「陸支密大日記第 9 号 2-4 所収」）などを使って紹介した。

○　菊池報告「上海租界と百貨店研究について」は、まず租界都市上海に百貨店が生まれる歴史的条件として、共同租界に「華洋雑居」型の資本主義が形成される過程をたどり、その間に中国人と外国人間、中国人相互、外国人相互で活発な不動産取引が展開されたことに注目する必要があり、中国と諸外国との不平等条約という角度のみでの租界研究は再検討を要すると述べた。さらに、南京路を中心に開発が進んだことと大衆的都市文化が開花したことに関連して、「「華洋雑居」の共同租界は中国人社会でもある。この中国人社会は西洋文明などインターナショナルな要素を受容し、江南のトラディショナルな文化や中国のローカルな文化を継承し、彼らの都市生活のニーズに適応させ、新しい都市文化（上海化したモダン上海という大衆文化）へと昇華した。」と大変に興味深い指摘をされた。

なお、菊池氏は長年本学付属高校で教鞭をとられて最近退職されたばかりであり、『民国期上海の百貨店と都市文化』（研文出版、2012 年、中国語訳では『近代上海的百貨公司与都市文化』、上海人民出版社）を始め、上海租界に関する多くの論文を発表されている。（大里浩秋）

2　2013 年度第 1 回研究会は、5 月 24 日（金）に開き、孫安石と村井寛志氏が報告した。

○　孫報告は、韓国・国民大学中国人文社会研究所で開催されたシンポジウム「現代中国知識網絡的動力」に参加して、そこで話題になったことを紹介するものであった（詳細は割愛）。

○　村井報告は「民国期上海メディアの香港における“転生”―戦中、戦後の『良友』画報から―」のタイトルで行った。村井氏はすでに論考「上海大衆文化と香港・華僑資本『良友』画報の事例から」（『アジア遊学』第 103 号『良友』画報とその時代、2007 年）の中で、1990 年代に「老上海」に対するレトロ趣味的な見直しが進む中で、上海の大衆文化が香港を介した広東系華僑ネットワークの資本、市場とも密接な関わりをもっていたことを明らかにしているが、今回の報告では、1930 年代の上海事変と 1945 年以降、とくに 1954 年以降、香港で発行された『良友』画報の概略を紹介するものであった（以下、香港版『良友』と略称）。

それによれば、上海の『良友』の創立者・伍聯徳名義で発行された香港版『良友』は 1954 年から 1968 年まで発行されたが、その経営面における連続性を考えるときに、上海時代の『良友』のスタッフとの関与は薄く、政治的な傾向としては国民党依りの記事が目立つ、とい

う。香港版『良友』の内容は、①香港を中心とした流行と風俗を紹介するもの、②香港と東南アジア、そして太平洋地域を含んだエキゾチックな民俗文化を紹介することに多くの紙面を割いており、例えば、イギリス領のサラワク州（沙撈越、Sarawak）先住民やギルバート諸島（吉露抜群島、Gilbert Islands）、台湾の先住民、チベット、インド、東南アジアなど幅広い範囲に及んでいた、という。しかし、その記事は写真を中心としたもので、文筆家としての有名作家の寄稿はあまり見られない点も紹介された。また、興味深かったことは、1954 年 11 月に発行された香港版『良友』の第 3 期には世界各地における雑誌の販売所（ネットワーク）が掲載されているが、その分布はアメリカ、カナダ、フランスの他に、キューバ、ベネズエラ、インド、マレーシアなどに広がっていた、という点である。これは華僑を読者にしたいという香港版『良友』の狙いを窺わせるものとしても興味深い。報告の最後では香港版『良友』の他に、1971 年には快活出版社を版元とする『良友』が発行され、1984 年には創立者の伍聯徳の子である伍福強による復刊が再度試みられ、1998 年の停刊まで 174 期が刊行されたことなども紹介された。（孫安石）

3　2013 年度第 2 回研究会は、7 月 25 日（木）に橋本雄一氏（東京外国語大学）、木之内誠氏（首都大学東京）を招いて開催した。

○　最初に、孫安石氏が「上海の日本語新聞『上海新報』がみた中国（Ⅰ）」のタイトルで報告した（内容の紹介は、2013 年度年報『非文字資料研究』に掲載予定なので割愛する）。

○　橋本報告「大連の中国語新聞『泰東日報』と植民地都市のトポス―第一次大戦後、五四期という時間と空間―」は、1908 年に大連で創刊された中国語新聞『泰東日報』の 1919 ～ 20 年に発表された傅立魚（ペンネーム西河）の複数の文章を取り上げることで、彼が中華民国「国民」として、大連を支配し植民地化した日本人にさまざまに物申し、例えば、日本は中国を支那と呼ぶのを改めるべきとか、満鉄は中国人乗客への差別待遇をやめるべきとか主張し、また、住民の土地や家屋、教育、医療、あるいは治安に関して日本側の保護を要求したことを紹介した後、傅の文を読んで気づいたこととして、「総体的なかつ多様な意味での帝国植民地を経営する側の人間（ロシア人、特に日本人）は「都市計画」としての大連＜政治＞や後代の大連＜記憶＞に従事した。戦後日本人の＜記憶＞は往々にして、・・・整序と排除を事とした帝国日本の大連「都市計画」に、まさに似ていないだろうか（清岡卓行『アカシアの大連』を始め）。」と述べた。抽象的な表現で、大里には理解できないところもあったが、それに続けて「そのような＜政治＞と＜記憶＞に読まれなかった＋見えない中国語新聞による歴史と空間についての語りを、なんとか地図作成のなかに生かすことが必要となると思われる」と述べるのは、現在共同研究で下記木之内氏らと大連の歴史地図の作成を準備している橋本氏の志を示すものとして、理解できそうな気がした。

○　木之内報告「大連の歴史地図の作成について」は、橋本氏他数名と科研費基盤 C を得て「旧満洲地域の都市歴史文化地図シリーズ第一分冊「大連、旅順編」の制作」に取り組んでいる中間報告として、作成途中の大連市内の歴史地図を示し、かつ取材した大連市内の現状を画面で紹介しながら、作成の苦心や取材中のエピソードを話された。木之内氏は先に『上海歴史ガイドマップ』を公刊して好評を博しており（初版は 1999 年、増補改訂版は 2011 年、大修館）、その際の経験は大連の歴史地図を作成する際にも生かされるに違いない。まして、大連と旅順は、日本が日露戦争に勝利してロシアから奪い取った租借地であり、1945 年の敗戦まで我が物顔で占領した土地であるから、その占領ぶりが地図上に反映されるに違いないのである。（大里浩秋）

1 月 11 日研究会の様子

5 月 24 日研究会の様子

7 月 25 日研究会の様子